

『走れメロス』のシン・社会学¹

—出口智之（文学）と見田宗介（社会学）の議論を受けて—

榎田 美雄

摂南大学現代社会学部

kashida.yoshio@nifty.ne.jp

Shin- Sociology of “Run Melos!”

: Examining the views of T. Deguchi and M. Mita

KASHIDA, Yoshio

Setsunan University

Keywords: “Run, Melos !”, game theory, reset method, tit-for-tat strategy, Grim trigger strategy

要旨

本論文は、『走れメロス』の「シン（新しくて／深くて／信頼にかかわる）・社会学」である。『走れメロス』という作品は、通常、王とメロス（達）の対立の物語と読まれている。そのうえで、「疑心暗鬼の王」に対し、「友情の価値に命を賭けたメロス」が奇跡的に勝利した「ハッピーエンド物語」として扱われてきた。しかし、この「ハッピーエンド物語」を単純に、「疑心暗鬼派の王が敗北し、友情を信じ続けたメロス派が勝利した」と読み取ってはならない。そのような読みは、太宰の記述と齟齬を来している。では、どのように読めばよいのか。

著者は、さきに『走れメロス』からの社会学（榎田 2023）において、第3のアクターとして「リセット儀式（群衆の前での、メロスとセリヌンティウス間での相互殴打と相互抱擁による信頼ゲームの再開儀式）」を登場させ、この「儀式」こそが、王を惹き付けた根拠と考えられ、勝利したのは、じつは、相互殴打と相互抱擁による信頼ゲームの再開儀式を慣習として所持していた国民文化だった、という主張にも受け取れる論述を行った。

本稿でも、この前稿の立場を維持する。しかし、その社会学的含意と文学的含意については、拡張を行いたい。その拡張のための補助線として、出口智之および見田宗介のメロス論を利用する。出口において、事態への群衆の関与の意味が読み飛ばされてしまっていること、見田において、人間の無目的性が人間の特徴である場合、その特徴が〈共生〉とは逆方向に働く可能性が見落とされていること、この2点を指摘しながら、出口や見田の所論から、どのように「走れメロス」の読解を豊かにするアイディアの調達が可能であ

るか検討した。結果として、『走れメロス』という作品が、社会学を革新し、革新された社会学の議論が、『走れメロス』の議論を深め、かつ、そこに「非功利主義的合理性を基盤とした新しくて深い信頼社会学」が成立する可能性があることを示した。

1 『走れメロス』はどのような物語か

1.1 もっとも読まれ、もっとも新しい読みを必要とされている物語

太宰治の『走れメロス』ほど、人口に膾炙している物語も珍しいだろう。青森ではお菓子パンの袋にもそのロゴが踊っている（「写真1」参照）。しかしその有名さは、文学としての評価が高いからというより、「修身なきあとの道徳教材」²として、中学2年生の全教科書でテキスト採用される時期もあった³という「普及」の仕方であった。そのため、『走れメロス』の読解に関しては、その道徳性をどう評価するかということが重要な課題となり続けてきた。しかし、二一世紀の今、社会は複雑性を増し、そもそも「道徳的であること」が「道徳規範に従順であること」であるとは単純に言えなくなってしまってい



写真1 工藤パンの黒糖カステラサンド上の『走れメロス』（掲載許可取得済）

る.⁴とするのならば、『走れメロス』への問いは変わらなければならない。そもそも、走り続けることは何をしていることになるのか、王とメロスはどの水準で対立しているのか（あるいは、していないのか）？メロスは小説の中で変化しているのかいないのか、というような諸点こそ問われなければならないのである。つまり、『走れメロス』には、新しい読みが必要なのである。

1.2 『走れメロス』に関する近年の読解の変化—王とメロスの合一説—

友情と信頼の物語としての『走れメロス』を批判する声は、中学生の間に広がっていたという。「メロスのわがままさについて行けない」「最終場面の王の豹変にリアリティがない」⁵等々。重要なのは、日本文学研究者の間でもそのような声に呼応した新しい批評の態度が広まってきていることである。たとえば、太宰治研究で有名な安藤宏は、(太宰によって)「王の懐疑とメロスの〈単純〉さとは……意図的に対比されている」と主張する。そのうえで、「[王の] 懐疑が懐疑を呼び、“罪”を深めていくそのありようは、少なくともメロスよりはるかに人間の弱点に忠実であるといわなければならない」と述べている。そして、最終的に、王とメロスの「合一の可能性が問われている」と主張している(安藤宏 2012: 174f, [] 内は引用者)。

これは驚くべき展開である。ウィキペディアの『走れメロス』の項には「人の心を信じられない王に信頼することの尊さを悟らせる物語」という紹介文が載っているが、ほぼその路線とは 180 度逆の読解になっている。というのも、安藤の議論における、「合一」とは、メロスの純粹さに王が寄り添っていくという方向での「合一」ではないからだ。(たぶん) 逆なのである。ここに可能性として書かれているのは、王の猜疑心の合理性⁶にメロスが近づいていく方向での「合一」なのである。そして、この議論の背景には、メロスが多く苦難に遭ううちに、「裏切りの合理性/妥当性」を真剣に検討するようになっていっているという事実がある。そういう視点で読むと、たしかに太宰は生き生きと楽しそうに「裏切りを検討しているメロス」を書き込んでいるのであった。そう、あの熱中症類似症状で倒れ込むシーンである。

午後の灼熱の太陽がまともに、かっとな照って来て、メロスは幾度となく眩暈^{めまい}を感じ、これではならぬ、と気を取り直しては、よろよろ二、三歩あるいて、ついながくりと膝を折った。立ち上がる事が出来ぬのだ。天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。……私は、おくれて行くだろう。王は、ひとり合点して私を笑い、そうして事も無く私を放免するだろう。そうなったら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切者だ。地上で最も、不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。きみだけは私を信じてくれるに違い無い。いや、それも私の、ひ

とりよがりか？ ああ、もういっそ、悪徳者として生き伸びてやろうか。村には私の家が在る。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すような事はしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。ああ、何もかも、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。(太宰治 [1940] 1967: 176f., 下線強調は引用者)

下線を2箇所引いてみた。

ひとつ目の下線は、王の「ひとり合点」の部分である。ここでは、メロスは実際にはセリヌンティウスを裏切って、自分の命が惜しくて遅れた訳ではないのに、王が勘違いをしてしまうだろうという意味で、「ひとり合点」という言葉が使われている。「ひとり」という極小数をあらゆる数詞が使われている以上、対語は「多数」ということになるだろう。すなわち、ここでは、言外に「多数」はそのように「裏切りの意図の表れ」としては「メロスが遅れてきたこと」を受けとらないだろうという構図が組み立てられて語られているのである。そして、この構図の下では、「裏切り」は「勇者メロス」にふさわしくないものとして、「友情への信頼を堅持していること」が「勇者メロス」にふさわしいものとして、まだ扱われ続けている⁷。

しかし、ふたつ目の下線を引いた「ひとりよがり」の部分では、雲行きが怪しくなる。こんどは、「ひとり合点」と類似の意味を持っているともみえる「ひとりよがり」という言葉が、王ではなく、メロスの方に使われている。つまり、「友情への信頼を堅持していること」が「ひとりよがり」かも知れないものとして、疑われているのである。

これはいったいどういうことだろうか。少し考えて見よう。友情関係の真実性を信頼するということは、友情関係の相互性を信頼するということである。けれども、普通には⁸、私の気持ちは私にしかわからず、相手の気持ちは相手にしか分からない。したがって、友情関係の相互性を信頼するには、相手からの証言を得る必要があるが、その相手からの証言に嘘が混じっているのか、いないのかの判別は、しばしば、相手を信頼しているかどうか依存している。ということは、相手を信頼している場合に、相手は信頼に足る相手になるというトートロジーが成立してしまうので、「ひとりよがり」と差がなくなるのである。このことはつまり、懷疑連鎖の強力さ（懷疑が懷疑を呼ぶ意味連鎖の強力さ）を意味している。相手を疑いだしてしまえば、自分の「信頼」の気持ちを疑うところまで人は容易に進んでいってしまうのである。

直前に、王の信頼懷疑の視線を「ひとり合点」となじってはみたものの、王の理解と真逆の理解である「相互信頼論的理解」には根拠がないということがわかってしまうと、簡単には王の疑心暗鬼化を笑うことができない、というかなり必然的な議論展開を呈示し

ている部分がこの部分なのであるといえよう。

2.1 王とメロスの合一説では解けない2つの謎

2.1.1 なぜメロスは刑場に駆け込んでいったのか？

王とメロスの合一説（王の合理的疑心暗鬼の態度に、メロスが近づいて行った物語として、『走れメロス』を讀んでいこうという立場⁹⁾）は、有力な立場である。しかし、それだけでは解けない2つの謎が、『走れメロス』には存在している。そこを確認しながら、メロスとセリヌンティウスの相互殴打の（社会学的）意義について考えて行こう。

まず、確認しなければならないのは、王の猜疑心の合理性である。王の疑心暗鬼は大変に秩序立っていて、合理的である。たとえば、王は以下のような順番で殺人を行う。シラクサの町の老翁が語る。「はじめは王様の妹婿さまを、それから、ご自身のお世継を。それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレキス様を」（太宰 [1940] 1967: 165）。

つまり、妹婿を殺し、妹を殺し、そして、なるべくなら殺さずに済ませようと考えていたように見える妹の子供まで殺してしまった王は、殺した人数だけみればただの残虐な王だが、この3人（あるいは5人）をいっぺんに殺したわけではないことに注目すれば、それはしっかりと抑制の効いた連続殺人であり、考え抜いた上での殺人であった、という理解に近づいていくことになるだろう。考え抜くことが、非殺人の方ではなく殺人の方に結び付くというのが悲しいところだ。

そして、この王の合理性は、相互信頼に基づいた相互行為の困難に由来している。メロスに「国王は乱心か」と問われた老翁がまた答えている。「いいえ、乱心ではございませぬ。人を、信ずる事が出来ぬ、というのです」（太宰 [1940] 1967: 165）。

この王の合理性に近づいていったメロスなら、「友達を信じることができない」状態に近づいていったはずだといえよう。そうであるとすると、メロスはもはや刑場のセリヌンティウスのところに駆けつけたりはしないのではないかと、というのが謎の一つ目である。つまり「なぜメロスは刑場に駆け込んでいったのか？」が、大きな疑問として出てくることになる。

けれども、実際には、メロスは走るのである。沈んでいく太陽の十倍も速く走るのがある。そうやって疾風のように、ぎりぎりのところで刑場に駆け込むのである。これはいったいなぜなのだろうか。小説のなかに、どのように読者を納得させる仕組みが組み込まれているのだろうか。

2.1.2 なぜ王は赤面しながらメロス達に近づいて行ったのか？

もうひとつ解くべき謎がある。最終場面の最終場面、本当におわりの部分で、王は赤

面しながら、メロス達に近づいていき仲間に入れてほしいと頼む¹⁰のだが、これを可能にする文脈はどのように存在しうるのだろうか。

上述のように、単純な「王とメロスの合一説」に則ったのでは、メロスは再度の走り出しをせず、刑場には走り込まないはずだ。もちろん、実際にはメロスは刑場に走り込んでいるので、王とは違う価値観を持った状態になっているはずである。とすると、王はメロスとは仲間ではないので、仲間に会いに行くようにメロスに寄っていくという文脈がそもそも成り立たないのではないか。さらに、刑場に走り込んで行きながらも、王の懐疑の深さにメロスが追いついていて、そのことを王も見抜いているという可能性があれば、「仲間になろう」と王が言い出してもおかしくはないが、そのときは、「赤面して」の部分が説明不能部分として残ってしまう。王の方が前任者だからである。王には不明を恥じる理由がないからである。これが、第二の謎である。

2.1 王とメロスの合一説では解けない2つの謎への回答の試み

2.2.1 メロスはどのようにしてまた走り始めたのか？への回答の試み

先の 2.1.1 で問われた問いは「なぜメロスは刑場に駆け込んでいったのか？」であったが、この問いは「メロスはどのようにしてまた走りはじめたのか？」に変換可能である。自分がひとりよがりな、「友情物語」の主人公を気取っているだけかもしれない、と一度気がついてしまえば、もとの「友情物語」への忠誠心をバネに命を捨てるような行為を続けることは困難になるはずである。それなのに、メロスはまた走り始めている。これはなぜなのだろうか。どのような契機があの場合の中にあっただろうか。

「天啓説」がひとつの回答案としてあり得る。「ふと耳に、潺々^{せんせん}、水の流れる音が聞こえた。そつと頭をもたげ、息を呑んで耳をすました。すぐ足元で、水が流れているらしい。……泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手で掬^{すく}って、一くち飲んだ。ほうと長い溜息^{ためいき}が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労回復と共に、わずかながら希望が生まれた。義務遂行の希望である。」(太宰 [1940] 1967: 177) という部分を読めば、こんな幸運の連続は「天啓」でしかあり得ないだろうと思えるだろう。たまたま倒れ込んだ足元に、幸運にも、泉が湧き出ている、その水を飲むと「夢から覚めたような気が」するというのは、神がもう一度走れと言っているように、メロスには思えただろうと思う。

けれども、単純な「天啓説」あるいは「神の恩寵説」を安藤 (2021) は退ける。安藤は、太宰が参照したであろうことがほぼ学史的に確定しているシラー (シルレル) の原詩の翻訳文と、太宰の『走れメロス』の文章を詳細に比較し、以下のように結論づける。

原詩にあって主人公を清水に導き、再生の力を与えたのは、人為を越えた力——

恩寵——である。……霊力を持った「水」がメロスの体内に注ぎ込まれることによって、奇跡が可能になったのである。だが、太宰は、シラーが原話から見いだした「神の恩寵」を、正面からは受け止めていない。たしかにゼウスに懇願するくだりは生き残っているものの、彼は神への畏敬よりはむしろ、徹底して地上の人間関係の論理を選択している。走り始めた当初、メロスが走る理由は〈身代わりの友を救ふ為〉であり、また〈王の奸佞邪智を打ち破る為〉だったはずなのだが、後半に至ってその動機はすでに変質しつつあった。彼は〈義務遂行〉のため、という一念のみで走っていた。（安藤 2021: 762）

なるほど、「神の恩寵説」に飛びついてはいけない理由は分かった。しかし、人間世界の論理に則って生きているのなら、どのようにして「懐疑の連鎖」の合理性を乗り越えることが可能だったのか。〈義務遂行〉のためという理由が間違いだ、というつもりはないが、それがどのように「再度走り出す理由」として適切になるのかの説明は安藤の説明だけでは、かなり不足しているように見えるのである。「メロスはどのようにしてまた走り始めたのか？」の問いに対する答えは、ここまでの検討では十分に出ていないというべきだろう。その答えは、本論文の後半において、見田宗介のメロス論を参照することによって得られることになるだろう。

2. 2. 2 なぜ王は赤面しながらメロス達に近づいて行ったのか？への回答の試み

先に「合一説」のうち、あり得ない方として、「人の心を信じられなかった王が、メロスとセリヌンティウスに、人の心を信じることの大事さと尊さを教えられて、メロスに王が近づく形で合一が成立した」という形の合一説をあげた。しかし、このあり得ない説をとらなければ、「王が赤面しつつメロス達に近づいて行く」というこの最終場面は解釈できないのではないか。この事実は、つぎのような派生的議論をも成立させる。

つまり、逆の「合一説」の場合、つまり、王の立場にメロスが近づいて行った形での「合一説」の場合には、立場的に先行者であって、優位に立っている王は赤面する必要がない。そうである以上、そして、太宰が明確に「王の赤面」（太宰 [1940] 1967: 181）を書いている以上、起きたことはどちらの「合一説」でもない、別の事象だったのではないか。そういう疑問が湧き上がるのである。この新しい疑問への答えは、本論文の第 5～9 節において、榎田（2023）ほかに依拠しながらなされることになるだろう。

3 出口の「メロスの無反応さ」指摘と見田の「無償化された友情」指摘

3. 1 出口の「メロスの無反応さ」指摘から合一説批判へ

本論文は、榎田が『新社会学研究』8号に掲載した『走れメロス』からの社会学——

文学から学ぶ社会学と社会学から学ぶ文学の循環を『走れメロス』をもとに実践する（樫田 2023）の発展版である。なぜこの発展版を書かなければならなかったかという、よく読まれている文献のなかに、「走れメロス」にかかわって 2 つの問題が残ってしまっていたからである。それらを解く必要があるようにみえ、かつ解いたら重要な議論であるように思われたからである。

ひとつ目の問題は、東大の出口智之が、少年少女向けの国語学習の推奨本である、渡部・平野・出口ほか『国語をめぐる冒険』（渡部ほか 2021）中の論文「他者が見えると、自分もみえる」（出口 2021）で提出している「ある不自然さ」に関する問題である。

まず出口は、『走れメロス』（太宰 [1940] 1967）の最終シーンにおける「王の改心に対するメロスの反応が書かれていない不自然さ」（出口 2021: 123）を発見する。そして、この事実、すなわち「メロスの無反応」を、出口は「メロスの単純さがすでに失われている」証拠だと主張する。そのうえで、「無私の信頼があることを王に示そうとした結果、王の言葉を素直に信用できなくなってしまったのだとしたら、それはあまりに皮肉な結末です」（出口 2021: 97）と、あたかも太宰が、『走れメロス』において、文学的なアイロニーを描こうとしたかのように主張する。

そして、最終的に出口は以下のように議論をまとめる。すなわち、太宰は「友情と信頼の物語であると見せながら、その背後に信頼の成立は簡単ではないという痛烈な皮肉を隠し持ち、肝心なメロスの冷淡さの理由は具体的に記すことなく、様々な解釈ができるよう読者に委ねている」と（出口 2021: 97）。

こういう読み取りを、書かれていないことについての読み取りである点で「裏の物語」と命名はするが、この「裏の物語」は「書かれている内容と矛盾せず、しかもなぜそのように読めるのか、ちゃんと説明できる」（出口 2021: 97）ような読み取りであって、「何の根拠もない妄想」とは違うものなのだとして位置付ける。そのうえで、「表の物語」の正確な読解ができるようになれば、そのさきにこういう「裏の物語」の読解にも進むことができるのが、小説というものの豊かなところであって、そうやって人間理解の幅が思いもかけず広まっていくことが可能になるがゆえに、小説読解は実学なのであるという主張をしている。

出口の議論はそれなりに緻密で、なかなか読ませる立論にはなっているが、本論文の筆者としては、その議論を推し進めていく際の、「背理法的手続き」の部分に欠陥があること、具体的には、「社会学的な状況的事実の無視」という大きな問題があって、納得しがたいことを指摘したい。

あるいは、これも一種の「裏の物語」的読みといえるのかもしれないが、テキストに書かれていることを精密に読むことでむしろ、太宰が書いているとおりの内容が書かれているんだ、そういう（アイロニックというよりは）「言われてみればそのとおりだ」とい

う小説として『走れメロス』を読むこともできるだろう、と思われた。

たとえば、メロスは「単純な男」だったと書かれていることを、途中で否定されるメロスの弱点のようなものとして扱うのではなく、「単純な男」だから走り抜けることができた、「単純な男」だからセリヌンティウスと抱擁することができた、「単純な男」だから「王」の改心を調達できた、そういう人物としてメロスを読む根拠にしてもよいのではないかと思われた。

この方向での読解の半分は、樫田（2023）において実施した。しかし、樫田（2023）の道具立てだけでは、「不自然問題（メロスの無反応問題）」は解決するが、メロスが清水を飲んで再度走り出すことができたのはなぜか、という問題が残ってしまうのである。残り半分の問題を解決するきっかけはなんと、見田宗介のメロス論から得られるのだが（後述）、そのまえに、見田の議論の概要を紹介しておく必要があるだろう。

3.2 見田の「無償化された友情」指摘について

著名な社会学者である見田宗介の「走れメロス」（見田 2016）は、太宰治の『走れメロス』を分析した論文ではない。しかし、「走れメロスの社会学」という論題の原稿を書こうとするものは、これを無視することはできないだろう。なぜならその論文は、社会学が『走れメロス』にどのように依拠することが可能なのかを書き表しており、かつ、そのことの裏返しとして、『走れメロス』に関して社会的想像力に富んだひとつの読解可能性を示唆してくれるからだ。

見田の論文は、直接には『現代思想』の2016年1月臨時増刊号「見田宗介＝真木悠介」（現代思想 2015）中のいくつかの主要な論考への応答として書かれている。いくつかの主要な論考としては、奥村隆の「(明晰)なる反転」（奥村 2015）がまずあげられ、ついで、若林幹夫の「翼と足-重層する時間と空間」（若林 2015）があげられている¹¹。それぞれが、この論文の第1節と第2節で主に応答されていて、かつ、その応答の中に『走れメロス』への言及はない。

これに対して、第3節には以下の通り、直接に『走れメロス』への言及がある。

メロスとセリヌンティウスは、共同体の外部とは断定できないが、現実には都市を越え国境を越えて、実にさまざまの契機から、無償化された友情が胚胎するということがある。

この友情は、ゲゼルシャフト（第Ⅱ水準の社会性）の大海の中で、波頭のように派生する、部分的なものにすぎないが、派生的、部分的なものであるままで、人間が生きるということの全体を支えるに足る、無償の目的として立つことのできるものである。（見田 2016: 23, 下線強調は引用者）

第3節は、対象とする論考としては今福龍太のもの（今福 2015）、成田龍一のもの（成田 2015）もあげられているが、その中心部は、大澤真幸の「〈自我の起原〉論」（大澤 2015）における大澤の批判への、見田からの応答である。

なお、この第3節には「ナワトルの歌——無償化について」という節タイトルがついており、「無償化」は副題部分のキーワードである。この「無償化」が上記引用において、メロスとセリヌンティウスの「友情」に関する形容として使われていることからわかるように、『走れメロス』において見田が読み取ったこの「無償化された友情」というイメージは、大澤から寄せられた批判への応答の中心的内実として、呈示されているといえるだろう。

では、それはどのようなイメージなのだろうか。

拙速は避けよう。まずは、大澤の非難を要約するところからはじめよう。そうしなければ、見田が何を言おうとしているかの焦点はぼけてしまうだろう。だから、まずは見田が大澤の非難をまとめている以下の部分の引用をすることにしよう。

大澤の問題提起は、生命世界の種間関係の原理はあくまでも競争であり、これこそが生物進化の論理的な前提である。この普遍的な競争関係の地の中に、相互肯定的な共生関係も多く見られることは事実だが、それはこの競争の戦略的な方法として、派生的、部分的な現象であり、このようなものを、解放の根拠の一角として前提することはできない、と。これは実質のある問題である。（見田 2016: 22、下線強調は引用者）

つまり、見田が強調する「相互肯定的な共生関係」、たとえば、花がミツバチに蜜を供給して、ミツバチは花の雌しべの受粉（受精）を助けるという関係は、「共生関係」とたしかに呼べるし、そういう「共生関係」が存在しないわけではないけれども、そのような関係であっても、論理的には生物間の競争関係が基盤となっているので、解放の根拠とするのは無理があるのではないかと大澤は主張するのである。

これに対し、見田は、2段階に分かれた、驚くべき回答をしている。1段階目は、「〈共生〉のループの方が……エゴイズムよりも永続可能な安定した進化戦略として、じつは進化の大道を形成している」（見田 2016: 23）という主張である。世界はぎすぎすした競争関係で埋まっているというよりも、なぜそんなものがあるのか直接的には不明な、不思議な共生関係で埋まっているという主張である。

そのうえで、2段階目の回答に見田は進む。すなわち、個別の偶発的な諸条件の在り方としては、競争関係に囚われている「個体」としての存在であったとしても、少なくとも大脳皮質の極度に発達した人間においては、「個体」は「個体の意志に従うこと」を目的

とする自由を得てしまっているのです。その限りにおいて、遺伝子（生成子¹²）の再生産という鉄の目的合理性を乗り越えて「個体」を「意志」に従わせることができる。このことを見田は「どんな目的にも仕えることのないもの」になることとし、それをまず「無償化」と呼ぶのである。そのうえで、「どんな目的にも仕えることのないもの」は「どんな目的をも持つことができる」ので、「主体」になるのである。つまり、主体化するのである（見田 2016: 24）。

見田は、第3節の最後に、第2次世界大戦末期の沖縄戦における「痛ましい例」¹³をあげながら、「人間の解放」に関する2つの条件の関係を解説する。すなわち、人間が「無償化」によって「主体化」可能であることは、まず「〈テレオノミーの解放系〉」と呼ばれる。これは「ひめゆり」隊の場合でいえば、日本陸軍の統制から外れ、どこにでもいくことができるようになる、つまり「自由」になることであるが、それは、「解放の抽象的、形式的な根拠」に過ぎないとされる。これに対し、世界に生き残りの可能性があること、そのような意味で「生命世界のシノモン¹⁴的な交響の可能性」があるということは、「ひめゆり」隊の場合いけば、どこかにいけば降伏の可能性があること、希望があることを意味するが、それは「解放の現実的、実質的な根拠」である（見田 2016: 26）。

さて、問題は、この見田（2016）による応答を我々はどのように受け取るべきかということであり、かつ、その受けとり方に沿った理解をしたときに「走れメロス」がどのような作品として見えてくるのかということである。

議論の見通しをよくするために、先取的に結論を書くのなら、人間自身が人間の環境の一部なので、ありとあらゆる目的から自由になることで「主体化」した人間は、「生命世界のシノモン的な交響」の中に放り出される可能性もあれば、そうならない可能性もある（「ひめゆり」隊のように）というしかないはずだ。

けれども、メロスとセリヌンティウスの友情は、見田の把握のとおり「無償化された友情」である可能性は十分にあり、そこに「人間存在の凝縮」（見田 2016: 24）を見ることも十分に可能であろう。本論文全体との関連でいえば、この「主体化した人間」による「無償化された友情」イメージを用いれば、メロスが再度走り出すことが十分にあり得ることを主張でき、かつ、メロスとセリヌンティウスの相互殴打シーンの解釈がより精緻なものとなり、さらには、最終場面で近づいてきた王にメロスが反応しなかった理由も、直接的に説得的に語れるようになるだろう。しかし、そのための記述はここでは出来ない。相互殴打シーンの意義をまずは確認しなければならないからだ。

4 メロスとセリヌンティウスの相互殴打の謎—大団円の直前の不思議な儀式—

新設学部（摂南大学・現代社会学部）の授業で「文化社会学」を開講しているので、文学の社会学をする必要があった。しかし、教科書をたくさん購入させるわけには行かない

ので、可能な限り、青空文庫掲載の文学作品で授業を組み立てる必要があった¹⁵。

とそのような関心でいたときに、太宰の『走れメロス』なら、たくさん論争がされていて、かつ、青空文庫で読むことができることを知った。そこで、『走れメロス』を読み、何か論点はないかと探すと、あった。社会学者である自分と文学者達の読みが食い違っている部分（あるいは、注目点が別のものになっている部分）が発見されたのである。それは、終盤、メロスがセリヌンティウス（人質だった友人）の救出に成功した直後のシーンで、王様がメロス達に仲間入りを願い出る「大団円」の直前のシーンである¹⁶。そこに、メロスとセリヌンティウスが殴り合うシーンがある。短いので、当該部分の全文を引用しておこう。

「セリヌンティウス。」メロスは眼に涙を浮べて言った。「私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若し私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえ無いのだ。殴れ。」

セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首肯き、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴った。殴ってから優しく微笑み、

「メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生れて、はじめて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱擁できない。」

メロスは腕に唸りをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。

「ありがとう、友よ。」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それから嬉し泣きにおいおい声を放って泣いた。（太宰[1940]1967:180f.）

『走れメロス』は、教科書掲載によって有名になったのだから、この部分の標準的読解としていわゆる教科書ガイドの記載を用いてもそれほど問題にはならないだろう。ある教科書ガイドによれば、この部分は、「メロスとセリヌンティウスは、疑いの心が芽生えたことを互いに告白し、許し合う。」（文理2021:109）という解釈だった¹⁷。

たしかに告白もし、許し合ってもいる。しかし、この読解の内容では説明不足に思われた。許し合うのに、なぜ、殴り合う必要があるのかが書かれていないからである。しかも、二人は音高く殴り合っている。まるでお芝居を演じているようである。しかし、そんな芝居がかった行為をする必要性はどこにあったというのだろうか。教科書ガイドの説明では、読者が納得する理由が説明されていないのである。著者太宰においては、気を付けて書き込まれた内容であるはずの部分について、その内容の読み取りがなされていないのである。メロスとセリヌンティウスの間でなされている、この相互的なバッシング（殴り合い）がどのようなものであり、かつ、その社会的必要性は何に由来して、そして、それはどんな結果を生む行為として描かれているのか。そこが、説明されていないのである。

いや、そもそも、冒頭で王の猜疑心の深さを王の思慮深さとともに読まされ、そのあ

と、勇者メロスですら、「裏切り者」になりかかってしまうというストーリーを、やはりその合理性と共に読まされてきていた我々読者には、この最後になっての両者の「許し合い」は、虚偽のもの、再度の裏切りの可能性が残っているもの、合理的ではないものに見えて仕方がない、とすら言ってよいだろう。この問題はこの小説において、あるいは小説読解において、どう処理されているのか。

王の猜疑心の合理性を強く主張する前半が存在するのにもかかわらず、この最終場面で、こんなに簡単に「許し合い」が可能になっているのは、なぜなのだろうか。その「不思議」を可能にする読解が必要なのは、必ずである。

この「メロスとセリヌンティウスの相互殴打シーン」については、これまでよりも精密な読解が必要となるように思われたのである。相互殴打は、一つのコミュニケーションである。とするのなら、コミュニケーションの社会学から議論を引いて考えることに価値があるかも知れない。次節では、アクセルロッドの『付き合い方の科学』をもとに、ゲーム理論的読解の試みをしてみよう。

5 アクセルロッド『つきあい方の科学』における「しっぺ返し」戦略的協調関係の生成機序

「ゲーム理論」の研究者として名高いアクセルロッドは、『つきあい方の科学』の第4章に不思議な話を書いている。「第一次世界大戦中、西部戦線では壮絶な戦闘シーンが繰り広げられていた。けれども、その激しい戦闘のあい間に、また、そのまっただ中でさえ、フランスとベルギーにまたがる五〇〇マイルに及ぶ前線では、敵の兵士が注意深く攻撃を手加減してくることがよくあった。」(Axelrod 1984=[1987] 1998: 74)。

つまり、戦場であっても、いくつかの条件が揃えば平和/秩序が自然構築されるというのである。アクセルロッドはその条件を検討する。そして、(いくつかの条件が揃えば)「両方とも手加減することの報酬は、ともに傷つけあうことの結末よりも現場の部隊にとっては望ましい」ことに気が付く。「膠着した地区で、敵と味方の小さな部隊同士が自律性をもって対峙している」という条件がある時、塹壕戦を闘っている歩兵達は、「反復囚人のジレンマゲーム」を生きることになる。そして、そのような条件下では、しばしば「しっぺ返し」戦略が両方の部隊で、とるべき戦略として(自然と)採用されていったのである。具体的には「もし、ドイツ軍が、こちらの塹壕の前衛部分を砲撃してイギリス兵を五人殺したら、こちらの答えは、五人のドイツ兵に連射を浴びせることである」という手記に書かれた「しっぺ返し」的行動規範が、各塹壕戦の前線で生じたのである。

アクセルロッドはこの状況を、以下のようにまとめている。「塹壕戦がほかの戦闘ときわめて違うところは、敵味方の同規模の小さな部隊が、場所を固定して一定期間以上対峙する点にある。このためゲームの状況は、裏切りを選択する方に分がある一回きりの囚人のジレンマから、相手の出方に応じた条件つき戦略が可能となる反復囚人のジレンマに変わったのである。結果は理論上の予測どおり、互惠主義にもとづいて協調しあう関係に落ち着いた。つまり、両方とも自分の方から先には裏切らないが、相手が裏切ってくれば、

怒りを抑えないという戦略をとっていた」(Axelrod 1984=[1987] 1998: 79)。

つまり、アクセルロッドは、塹壕戦のような状況、すなわち、同じ相手との「反復囚人のジレンマゲーム」が成立しているという認識が現場に生まれやすい状況では、「一回限りの囚人のジレンマゲーム」とは違って、単純な自己利益追求(相手への攻撃)は、結局、相互的な裏切りを招来して相互にとって損だから、手加減し合うべきだという道德秩序が生成しやすい、と述べるのである。そうやって、不思議なことに戦場に「平和」がもたらされていたのだという主張をしているのである¹⁸。

次節に進んでアクセルロッドの議論を「走れメロス」に応用するためには、第一世界大戦のヨーロッパ戦線の塹壕戦で起きたことを、もう少し詳しく述べておく必要がある。すなわち、そこで成立した「平和」は、まったく相手を攻撃しないという寡黙で非武装的な「平和」ではなく、いつでも「攻撃」できるが気をつけてしないようにしているのだということの表出を秩序形成の要件とするような、おしゃべりで武装的な「平和」なのだということである。つまり、“お互い痛い目に遭いたくないなら銃をホルダーに入れたまま右手で握手をしようぜ”という、脅し合いながらの「平和」であったとたぶんいうことができるのである。

しかし、それは次第に安定的なものになり、儀式化していく。たとえばアクセルロッドは、「儀式化された攻撃」(Axelrod 1984=[1987] 1998: 91)として以下のような状況が生じたことを紹介している。ドイツとイギリスの両陣営はともに、相手の兵が「まちがって」砲弾にあたって死傷してしまわないように、予期可能な時間(定時)に予期可能な場所に着弾するように、けれども、自由自在な攻撃能力が自らには存在することは呈示できるように、毎回少しずつ違った場所に大砲を撃ち合っていた。

また、より直接的にそこで武装的「平和」が生じていることは、以下の事例でも示されていた。すなわち、「我慢できない攻撃をうけると、一発につき二発あるいは三発打ち返す」習慣が両軍には成立しており、そのようにして、背景に「仕返し戦略」(自分からは裏切らないが、相手が裏切ったら直ちに報復するという戦略)を持ち合った上での、武装的「平和」であることを表示し合っていたのである。

ここまでくれば、「走れメロス」における「メロスとセリヌンティウスの相互殴打(および、その後の和解)」がどのようなものであったかは、おおむね見えて来たのではないだろうか。次節と次次節では、このアクセルロッド的ゲーム理論的「走れメロス」解釈が、「王の歩み寄り」の謎を解くことにまで結びついていくことを示していこう。

6 メロスとセリヌンティウスの殴り合いは、どのような意味で、その後の和解の準備たり得たのか？(前半)

この節でまず問わなければならないのは、「メロスとセリヌンティウスの殴り合いは、どのような意味で、その後の和解の準備たり得たのか？」という問いである。その作業をしていこう。

まずそれ（殴り合い儀式）は、1回試行の「囚人のジレンマゲーム」の場合、「裏切り」への強い誘因が働くことがあることを相互に承認する儀式として営まれている、といえよう。

その証拠は最初にメロスの眼に浮かんだ「涙」だ。「涙」が意味するのは懺悔であり、懺悔は、メロスの行った「裏切り」が「外形的に裏切りに見えただけのもの」ではなく、謝罪が必要でふさわしい、中身のある「裏切り」であったからこそなされるものである。つまりここでは、メロスの裏切りは、「道徳的な意味にかかわる、自発性を伴った裏切り」であることが確認されているのである。

しかし、もし「裏切り」がしっかりとした「誘因」に惹きつけられて生じたものならば、2度目の「裏切り」も想定されなければならなくなる。けれども、「メロスとセリヌンティウス」はこのあと「和解」するのである。「抱擁」しあうのである。とするのならば、ここでは何らかの方法が講じられて「和解が可能」となっているように思わざるを得ない。そうでなければ、相互承認された「誘因の強さ」は「相手は次回もまた、今回同様、裏切る可能性があるだろう。環境に存在する裏切りの誘因に抗しきれないだろう」という推論にお互いを至らしめて、「和解（友情の再確認）」にいたることが困難になるからだ。

ここにおいて「殴り合いシーン」の意義が見えてくる。第一世界大戦のヨーロッパ戦線において「儀式化された」大砲の撃ち合いが、両陣営間の「信頼関係」を強めていったように、「メロスとセリヌンティウスの殴り合い」は、一つの儀式として、両者の「信頼」を確保する^{いしずえ}礎になったと言えるのではないだろうか。アクセルロッドの議論にひきつけて言えば、1回試行の「囚人のジレンマゲーム」では「裏切り」が正解であっても、「相互脅し合い」的な儀式化を経由して、N回試行として考えることが有意義になった。「囚人のジレンマゲーム」では、「協調行動」（裏切らないこと）がお互いにとって有利なので、「1回の裏切りに1回の懲罰」というルール（しっぺ返し戦略）を目に見えるようにし、かつ、それを相互に承認する儀式としての「メロスとセリヌンティウスの殴り合い」は、二人の信頼関係を可能にするものだったといえそうなのである。

しかし、じつはこの説明には説得力がない。片方が「裏切った」ときに、主体としての相手が消えてしまうような「囚人のジレンマゲーム」では、試行回数のN回目を有意味とするような「未来」は存在しないからだ。そして、N回の囚人のジレンマゲームを想定できないようなケースでは、「結局、裏切りは長期的には損だから協調行動をしよう」というような「協調行動へのインセンティブ」は働かないので、そのような状況であっても「協調行動」が当事者によって選択されているとするのなら、その選択を合理的なものとして担保する仕組みは、別種のものとして探索され、発見されなければならないのである。謎は深まった。この謎を解いていかなければならない。

7 メロスとセリヌンティウスの殴り合いは、どのような意味で、その後の和解の準備たり得たのか？(後半)

確認しよう。「走れメロス」においては、セリヌンティウスは「人質」だった。そして、メロスは「単純な男」であった(太宰 [1940] 1967: 166)。(普通に考えれば)メロスの「裏切り(つまり、刑場への到着遅延)」が生じてしまえば、セリヌンティウスは刑死してしまうので、2回目や3回目の「囚人のジレンマゲーム」は考える必要がなくなるのである。そして、そのような状態の出現可能性を予期しないほど「単純な男」だったメロスは、山を駆け下りたあと、熱中症で動けなくなったときには、「正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。ああ、何もかも、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。」(太宰 [1940] 1967: 176)と、うそぶくのである。メロスは、積極的に裏切ろうとしているわけではない。また、無二の友を裏切ったあとの社会的制裁に関しても思考を巡らせている。しかし、メロスが予想した「社会的制裁(他罰)」は、じつは裏切りを可能とする水準のものだった。「村には私の家が在る。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すような事はしないだろう。」(太宰 [1940] 1967: 176)と推論するのである。「妹夫婦」という「外部統制機関」は、メロスを村から追い出さないのである。

つまり、メロスにとって、「裏切り」をしてもそのとき「セリヌンティウス」は死んでしまっており、重いサンクションは返ってこないで、友情(協調行動)を維持する合理的枠組は存在していないのである。セリヌンティウスからの「裏切り返し」は考えなくてよくて、社会的制裁は甘受できる程度のものだと予想されるのである。この、物語の途中での予想が、物語の最終場面で変化すると考えることに合理性はない。それならば、なぜ、メロス達の仲間に王が入りたがるという大団円は可能となったのだろうか。

考察のポイントは、「メロスとセリヌンティウスの殴り合い」が、「囚人のジレンマゲーム」の「リセット」の意味を持ったものであること、および、そのリセット後の「友情(協調行動)」を可能にする質を持ったものであったこと、この2つのことだろうと思われた。

では、まずはじめに、メロス達の殴り合いシーンがある「リセット」であったという証拠を確認しよう。それは、二人の次の発言である。まず、メロスは「君が若し私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえ無い」と言う。セリヌンティウスはメロスを殴る。ついで、セリヌンティウスは「君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱擁できない。」と言う。メロスはセリヌンティウスを殴る。

この二人の提案し合いのなかで入手目標になっているのは(相互に)「抱擁する資格」である。先にみたように、「友情」というものが真実性をもつためには、相互性を確保しなければならず、けれども、相互性を確保するためには、まずは、信頼が二人の間にあると考えなければならない。とすると、この「相互抱擁」こそは自分が相手を抱くと同時に相手も自分を抱えていることから、「根拠であると同時に結果でもあるような、なにもの

か)、すなわち、信頼によって条件付けられつつ信頼を可能にする、相互反映的な「儀式的相互行為」であるといえよう。

では、そのためにどうして殴り合いによる「リセット」が必要になるのであろうか。

繰り返しの「囚人のジレンマゲーム」における有力な戦略は、「しっぺ返し戦略（最初の期は協力をを行い、以降は他者が1期前に行った行動と同じ行動を返す戦略）」か、または、グリム・トリガー戦略（相手が非協力を行うまでは協力をを行い、相手が非協力を行った場合は、次の期からずっと非協力を続ける戦略）」の2つである。けれども「走れメロス」の場合、このどちらの戦略をとっていたとしても困ったことが起きる。もし、前夜から今日にかけての相互の裏切りを、初期値として受け入れて、そのうえで繰り返しゲームを開始してしまえば、二人は「裏切り合わざるを得ない」ことになってしまう。だからといって、ただ不問に付してしまうのでは、フリーライダー問題（ただ乗り問題）が発生してしまう。したがって、「(この三日間の裏切りを) リセットする仕組み」がどうしても二人には必要だったのである。それが、この「相互に抱擁する資格」を得るために「裏切りを告白」して、「殴ってもらおう」という仕組みが存在している意味であったといえるのではないだろうか。

さらにここにはもうひとつ重要なポイントがある。それは、この「殴り合い」が「自己申告によってなされている自己制裁的なものとなっている」ということである。もし、「殴り合いシーン」が相手からの（猜疑心にあふれた）追求によってなされた場合には、上述のメロスの述懐にみたように、「囚人のジレンマゲーム」において他者が存在しなくなるような決定的な裏切りは、抑制の外側の存在になってしまう（セリヌンティウスが死んでしまうような裏切りなら、セリヌンティウスの逆襲は受けない）。裏切りの誘惑をはねつける論理が存在しなくなってしまうのである。けれども、「裏切り」への罰則が、「自己申告によってなされている自己制裁的なもの」だった場合は、相手がいなくなるような決定的な裏切りの機会がある場合であっても、抑制が効く可能性が出てくるのである（たとえば、自己制裁をする主体なら、しっぺ返し戦略においてしっぺ返しをする主体がいなくても、裏切りに対してのサンクションを自己執行すると期待できるのである）。100%ではなくても、そこをお互いが信じあうという形で、「友情（協調行動）」を前提とした社会関係を結び得るのである。

そして、王が二人（メロスとセリヌンティウス）の仲間に加わりたいとこの直後に述べているのは、上述のような「儀礼的で慣習的な仕組み」がありうるのなら、疑心暗鬼の合理性にのみとらわれることなく、（裏切られるリスクは一定程度背負うことにはなるけれども）究極的には皆殺しに至り付く人殺しをすることでしか、身の保全を図れないという現在の地獄からは逃れることができる、と王が思ったからではないだろうか。もちろん、そのように王が考えた証拠は十分にはない。けれども、「裏切りあった過去」を「リセット」して「相互抱擁関係」を産み出したメロスとセリヌンティウスの「殴り合いシーン」が、王に魅力的に見えた可能性は高いと思う。

もちろん、メロスとセリヌンティウスは、二人だけでそのような「儀式」を遂行できたわけではない。刑場に集まったたくさんの国民が証人として見ている前でなされた「相互殴打」だからこそ、そのあとでなされた「相互抱擁」だからこそ、上述の「儀式性」を持ち得たとも言えるはずだ。

つまり、疑念の無限背進が起動され掛かっている際にその起動を防ぐのは、疑念の端緒となる事実を現在の判断行為から切り離すテクニックである。そういうテクニックが社会に埋め込まれてある形の一つとして、国民の前での相互殴打シーンがあったのではないかという意見なのである。

8 小括：どのような問題が残っているのか？

ここまでの議論でどのような疑義がでてきたかを簡単にまとめておこう。そうすれば、『走れメロス』に関して、どのような問題が残っていて解決が必要なのか、見通しがつくようになるはずだ。

残る問題は次の4つである。

第一に、2.1.1 で検討した問題、「なぜメロスは刑場に駆け込んでいったのか？」という問題が残っている。安藤（2021）によれば、「義務遂行」という「地上の人間関係の論理」（安藤 2021: 762）で駆け込んだということになるが、それが、どのようにして、「疑念の連鎖」を乗り越える行動力を得るのか、メカニズム的解明が必要である。

第二に、2.1.2 で検討した問題、「なぜ王は赤面しながらメロス達に近づいていったのか？」も解かれるべき問いとしての残っている。単純な「合一説」では、「赤面」の理由が説明できないのである。

第三に、3.1 の問題「出口の『メロスの無反応さ』指摘」問題が残っている。しかし、これについては、7節までの議論である程度、答えることが可能になっている。

もし、6節と7節での議論に説得力があるのなら、以下のように述べていくことが出来るだろう。

すなわち、メロスはここでは、相手役ではないから王の申し出に対し無反応なのは当然である。どういうことかということ、ここで（メロスとセリヌンティウスの）「和解」が可能になっているのは、メロスとセリヌンティウスが信じ合っていたからではないということが重要である。したがって「友情を疑わない仲間」は成立しておらず、したがって、そのような存在しない「仲間」に王は入っていくことができず、「仲間」でない以上、メロスは王のコミュニケーションの相手ではないので、反応ができないのである。

もう一つのアイディアは、出口が注目していないところに、重要な相互行為の成立があることである。

社会学の一分野に「エスノメソドロジー・会話分析」という領域があるが、この領域は現場でどのようなことが起きているのか、ということ、相互行為の詳細な分析を通して解明することを方法論としている。その方法論をここで少し援用してみよう。

たしかに、王は「メロスとセリヌンティウス」に語りかけている。「おまえらの望みは叶ったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。……おまえらの仲間の一人にしてほしい」（太宰 [1940] 1967: 181, 下線強調は引用者）。「おまえら」という呼びかけの対象に、確実にメロスは含まれており、かつ、メロスの反応は書かれていない。

けれども、この呼びかけは、全く応えられていないのだろうか。新潮文庫版の『走れメロス』の次の頁には、この王からの嘆願への応答とも取れる発声が以下のように書かれていた。「どっと群衆の間に、歓声があった。『万歳、王様万歳』（太宰 [1940] 1976: 182）。

樫田（2023）にもラフに書いたように、メロスとセリヌンティウスの大団円を可能にしたアクターは、非人間アクターとしての、「相互殴打と相互抱擁という儀式」であった。そして、この儀式の支え手こそは、刑場に集まった多数の国民大衆であったと言えよう。とするのならば、王の嘆願は、「相互殴打と相互抱擁という儀式」を見た王による、当該儀式の効果を王も追認する、というひとつの宣言であるともいえるだろう。とするのならば、そのような為政者からの「宣言」に聴衆が「承認の歓呼の声」を浴びせるシーンとして、出口が問題にしたシーンを解釈することもできるのではないだろうか。つまり、王の行為に呼応して相互行為しうる存在として、非人間的存在（非人間アクター）まで含めなければ、出口智之の推論は精度の高い間違いの無い背理法だ、ということは言えるだろうが、王の行為に呼応して相互行為しうる存在として、非人間的存在（非人間アクター）まで認めるのならば、十分な反応は返ってきており、王はそもそも無視されていない、ということも出来そうなのである。

けれども、やはり問題は残っている。先に、3.1の末尾で書いたように、どんな人物として、王に受けとられていたのか、という主要な問題。さらに、少し応用的なもの言いをするなら、刑場に集まった群衆は、何に歓呼の声を上げたのか問題が残っている。言い方をかえれば「相互殴打・相互抱擁」シーンを群衆はどんなものとして見たのか。そのあたりの問題がまだ残っているが、これは次節以降で回答ということになる。

第四に、見田宗介のメロス論から「無償化された友情」というキーワードが取り出されたが、このキーワードの含意を明らかにする課題が残っている。「無償化された友情」とはいったいどういう友情なのだろうか。その友情に掛けて、走るとき、メロスは「間に合う、間に合わぬは問題ではない」と走りながら主張する。さらに、「人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいものの為に走っているのだ」（太宰 [1940] 1967: 179）とも主張しているが、これらの発話の意味が他の小説内記述と整合的にどのように解釈できるか、が課題として残っているのである。

9 突破口としての見田の「無償化された友情」、あるいは、人間らしさへの解放

先に 3.2「見田の『無償化された友情』指摘について」の後半で見たように、見田においては「走るメロスの無償の情熱は、人間存在の凝縮」（見田 2016: 24）である。なぜなら、

人間だけが、「大脳皮質の極度の発達という進化のランナウェイ (cf. 孔雀の羽!) をとおして自己＝目的化し、生成子の鉄の目的合理性 (効用性) から自立し、解放される」(見田 2016: 24) からである。

つまり、ここでは、王が身につけた「合理性」とは別の「合理性」のイメージが提起されているのである。王は、王権を守り、王国を守らなければならないというような「目的」に縛られた合理性しか身につけていない。その合理性は、現在、一日に6人の(罪なき)国民を殺すような状態におちいっており、合理的であることの適否が問われる状況になっている。国民を信用しようとすればするほど、容易には信用できない、という合理的な思考メカニズムに陥っている王の悩みは深い。それに対し、メロスは、そのような「効用性」を判断するような合理的思考から自由である。だから、メロスは、次のように発言ができる。「私は、信じられている。……私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ」(太宰 [1940] 1967: 177)。

見田の「無償化された友情」というフレーズは、よく出来たフレーズである。つまり、「功利性」という軛から解放された「友情」なので、猜疑心が守ってくれるはずの「功利」というものを意識しない水準での「友情」なので、猜疑心の畏、疑心暗鬼の畏、に陥らずに済むのである。このようなイメージを「メロス」に当てはめることができるのなら、まず、一つ目の問いに答えることが出来るだろう。

すなわち、一度猜疑心に心を奪われても、「再度走り始めること」が可能になるのである。ちょっと無理矢理の主張をすれば、このように、功利性の外側で活動が動機付けられ得るのならば、メロスは「単純な男」のまま、刑場に突入できるのではないだろうか。もちろん、「単純な男」には2種類の内実がある。『走れメロス』の冒頭におけるメロスは、猜疑心を持って運用する能力がないという意味での「単純な男」であった。しかし、この熱中症で倒れたあと、再度立ち上がったあとの「単純な男」は、「友情」を無償化することで、猜疑心から自由になるという意味での「単純な男」なのである。そして、このような「単純な男」になることは、そこに一種の歓喜がともなうため、友人との約束がある、というような契機さえあれば、「人間らしさへの解放」として、誰にでも可能なひとつの生き方なのではないだろうか。

本節の議論をまとめよう。2.2.1で残されていた問い、すなわち「懷疑の連鎖」をどのように乗り越えて、メロスはまた走り出したのか、という問いについては、見田の「走れメロス」論を用いると答えることができる、とここでは論じた¹⁹。すなわち、「単純な男」 α (初期型) は、「懷疑の連鎖」にむかってむしろ進化していくが、「単純な男」 β (無償化された友情型の単純な男) は、「懷疑の連鎖」の影響力の圏域から自由になることができる、すなわち、人間性にむかって解放されるのである。

10 「無償化された友情」論による相互殴打・相互抱擁シーンの再解釈

「無償化された友情」論の立場をとると、『走れメロス』の最終場面の解釈はどのよう

になるだろうか。

じつは、「無償化された友情」論の立場とここまで述べてきた「相互殴打・相互抱擁シーン」の解釈とは、両立が難しい側面がある。「無償化された友情」を生きているアクターは、もはや「功利性」の外側にいるので、功利主義を前提とした「ゲーム理論」的合理性とは、相性が悪いのである。

けれども、樫田（2023）および本稿における「相互殴打・相互抱擁シーン」の扱いは、合理的選択の基盤を創り出すものとしての扱いというよりも、「裏切り」という「無償化された友情」の駆動を困難にする歴史を、リセットするものという扱いであった。相互抱擁は、そこで直接に友情の関係性を確認できるので、その相互抱擁のもっている「直接性」を阻害するかもしれないもの、すなわち、過去の疑心暗鬼歴を相互殴打でリセットすることさえできれば、「単純な男」β的な「無償化された友情」がそこに接続してもおかしくはないように思われるのである。つまり、通常は「功利性」に結び付いたものとして扱われるゲーム理論的知見を、猜疑心からの自由を可能にするリセット儀式に関する知見として読み替えて活用しよう、という方針もありうる、という主張をしているのである。

ここまでくれば、出口智之の謎（なぜ、メロスは王の願い出を無視するのか）を解く道筋も見えて来たのではないだろうか。

メロスは「無償化された友情」を生きていた。そうだとするのなら、それは、「仲間の利害」を越えた生き様なので²⁰、「仲間にして欲しい」と言われても反応ができないのである。それは当然なことなのではないだろうか。

とはいえ、このように再解釈された「相互殴打・相互抱擁シーン」であっても、N回試行のゲーム理論の一部としての質も持ち続けるといってよいだろう。なぜなら、人間に「主体性」があるといっても、まったく無意味な行動をするわけにはいかず、もし、刑場に集まってきていた国民大衆と場面を共有するのなら、たとえば、N回試行のゲーム理論上で有意義な活動をしているかのようにふるまって、「普通の振る舞いをしている」素振りをするようなことは容易に想像できるからである。

11 結語——『走れメロス』のシン・社会学に向けて

さて、ここまであちこち寄り道をしながら、『走れメロス』について考えてきた。大きな筋としては、王の悩みの深さに人間性を読み取ろうとする近年の日本文学研究者の方向性は是認出来るものであること、しかし、「単純な男」であったメロスが成長して、王に近似したから王との合一がなって、王が仲間にしてくれと申し出てきたという「合一説」には無理があるだろうこと、この2点をまずは主張した。

そのうえで、ゲーム理論（N回試行の囚人のジレンマゲーム）の成果をもちこんで、リセット儀式として「相互殴打・相互抱擁シーン」があったのではないかという仮説を提起した。また、見田宗介のメロス論を参照することで、「無償化された友情」というアイデアをもちいれば、なぜ一度疑心暗鬼の罠に捕らわれたメロスがその罠を振り切って、再

度走り始めることができたかは説明可能になる、という主張をした。

このようにまとめてしまうと、社会学の知見（ゲーム理論と見田宗介の社会学）を利用して、太宰の「走れメロス」を解釈しようとしているように見えるかも知れない。しかし、そのように見えるのなら、それは筆者の筆力のなさのせいである。

「走れメロス」の中に息づいているものとして、メロスの走り直しにリアリティがあるからこそ「無償化された友情」という見田のアイデアに説得力が生じるのである。我々が、この世に生きるものの智恵として、相互殴打・相互抱擁儀式というものを実際に実行しているからこそ、ゲーム理論に有意味性が帯びるのである。そのような往還の、そのような循環の「走れメロス」的事例として、ここまでの文章を書いてきた。『走れメロス』のシン・社会学という論文タイトルもそういう目標を意味するものとして付けたつもりである。

たんに文学作品を、社会学を例証する対象として扱うのでは無く、文学作品から学びながら社会学も豊かにするというそのような営為を、今後も（他の作品で可能なら）行って行きたい。次作では、森鷗外の『寒山拾得』を扱おうかと思っているが、『走れメロス』については、まだ扱えていない評論もあるので最終決定はしていない。このような方針についてのもも含めて、ご意見を頂ければ幸いである。

謝辞

アクセルロッドの本のほか、「囚人のジレンマゲーム」に関しては、日本数理社会学会の機関誌である『理論と方法』誌のいくつかの論文を参照した²¹。なお、本論文の成果の一部は、JSPS 科研費（課題番号「23K17573」「23H00877」）からの助成を受けて達成されたものである。記して感謝したい。

注

¹ 「シン・社会学」という用語法は、2024年の春である現在では『シン・ゴジラ』や『シン・ウルトラマン』や『シン・エヴァンゲリオン』のもじりである、と、容易に受けとってもらえよう。しかし、社会学論文の寿命が20年あると考えると、20年後に、そのように理解してもらうことは難しいかもしれない。そこで、いささか興ざめだが、タイトルのこの「シン」の部分に込めた含意を以下、注記しておく。それは、もちろん、多義的である（だから「カタカナ」表記になっている）。そこを無理矢理、漢字で置き直すと、「新」「真」「信」「深」あたりと呼応する形で、多義性を読み取ってもらえればと考えて、このタイトルとした。

ただ、『シン・ゴジラ』にはない含意としての「信」の意義については、ここでもう少し詳述しておくべきだろう。私の読みでは、『走れメロス』こそは「信頼社会学」の重要な題材なのである。『走れメロス』という作品が「疑心暗鬼の正当性」と「無根拠の信頼の妥当性」のせめぎ合いの物語であるという読みを本論文は基盤にしている。

その対立を基軸に、出口智之および見田宗介のメロス論を組み合わせ的に検討してみた、というのが、本論文の「成り立ち」なのである。

- ² 「修身」(小学校での「修身」, 中学校での「修身学」)とは, 明治の「学制」以後, 第二次世界大戦の敗戦後, 1945年12月にGHQによって禁止されるまでの間, 日本の道徳教育を担っていた科目の名称である。
- ³ 1940年に書かれた「走れメロス」は, 1950年代の後半に, 国語教育が「人間形成」役割を引き受けた時期に, そのために好適な作品として教科書掲載されるようになったという(幸田 2021: 122ff.)
- ⁴ もちろん, 太宰がこの作品を書いた1940年においても, 道徳に従うことの是非よりも, その困難さや問題性の方が議論に価するものであるという了解は, 太宰にはあったといっておいだろう。そもそも古くは, マンデヴィル(1714=1985)以来の論点として, 「私悪すなわち公益」という可能性も存在しているのだから。
- ⁵ この部分の中学生の感想は, 以下の論文内記述を基本として他の複数の文献を付加的に参照して, 最大公約数的に作成したものである。まず, 前半のメロスについて基盤とした感想は, 下記。「メロスがかってにセリヌンティウスを人質にしたから大変なことになったのでは? ボクならメロスが勝手に人質にした時点で, 縁をきってしまう。メロス最悪」(横浜国立大学附属横浜中学校の生徒)(高木 2001: 232)。ついで, 後半のディオニス王について基盤とした感想は, 下記。「こんなにすぐ人の気持ちはかわるものだろうか。信実とは空虚な妄想ではなかったとあるが, ほんとうにそんなにかわるものだろうか」(学校名不明の中学生)(田中 1996: 125)。これらは特殊な感想ではない。たとえば, メロスに関しては, 教科書ガイドに, 上記とほぼ同等な, 以下のような感想例が載っている。「・共感できなかったところ 軽々しく命を捨てようとしたり, 親友を人質に差し出したりするところ」(光村教育図書 2021: 145)。
- ⁶ 「懷疑が懷疑を生む」という王の在り方は, 王の望んでいるものではないだろう。したがって, 社会学的には, 「思わざる効果(いじわる効果)」の範疇に入る社会現象であると分析できる。悪循環という用語を用いるのなら, 「懷疑の悪循環構造に囚われている」とも言えるし, フィードバックという用語をもちいるのなら, 「負のフィードバックループに囚われている」とも言うことができるだろう。重要なのは, 結果が意図どおりでなくても, その循環やフィードバックには合理性があるので, その限りで合理的行為でもある, という性質が当該現象には備わっているということである。この「疑心暗鬼の合理性」に関しては, 榎田は, 精神科デイケアでの参与観察をもとに, 半実証的な論文を書いたことがある。榎田(1991)および, 参考として, 長谷(1991)を見よ。
- ⁷ ただし, ここでの「多数」には十分な裏付けがなく, したがって, 「王のひとり合点」を主張するメロスは, 「強がり」を言っている側面もある。「王の理解」(メロスは裏切

ったから遅くやってきた) には、「遅くやってきた」という証拠があるのに対し、「メロスの理解」(私は裏切っていない) には証拠がない。したがって、疑いは晴らすことが困難で、そのことは「死ぬよりつらい」(太宰 [1940] 1967: 176)。ことここに至って、メロスは疑いを晴らすために、セリヌンティウスの後を追って死ぬという主張をすることになる。

⁸ ここで「普通には」と書いている含意は、以下の意味である。「普通には」信頼を事実によって基礎付けることは困難で、したがって、信頼は次第に「疑心暗鬼の正当性」の方に流れていってしまう。けれども、「普通」でない儀式的やり方、たとえば、「相互殴打後の相互抱擁」という「リセット手段(取り様によっては、信頼の相互確認手段)」を用いれば、この「疑心暗鬼化」趨勢から逃れられるかもしれない、ということである。

⁹ 安藤宏(2021)の示唆する「合一説」は、もうすこし複雑なものとして、実際には書かれている。少し長くなるが引用しよう。「内省の欠如した、あまりにも素朴すぎる“正しさ”と、一方では自意識と懐疑に満ちた“露悪”志向と。「走れメロス」ではこの両者が対比されている点が重要なのであって、その合一の可能性にこそ、「走れメロス」いっぺんの独創がかけられていた」(安藤 2021: 759)。つまり、片方が片方に移動していくという「合一」だけが可能性として示されているのでは無く、片方だけでは問題のある両極端の立場の「合一」が示唆されているようだが、では、その「合一」のイメージやメカニズムはどのようなものか、という点に関しては、安藤(2021)は明確な解明をしてくれておらず、したがって、本節から続く筆者のような太宰読解にも、可能性は残されているといえるだろう。

¹⁰ 王が赤面しながら仲間に入りたいと述べるシーンは以下の通りである。

暴君ディオニスは、群衆の背後から二人の様子を、まじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、こう言った。

「おまえらの望みは叶ったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わたしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わたしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」(太宰 [1940] 1967: 181)

¹¹ じつは、見田(2016)の第2節では、森正稔「見田宗介と七〇年代解放論のゆくえ」(森 2015)にも言及がなされているが、そして、その言及部での、見田の述懐(「身近な経験から、私は『政治』というものに反発していた」)には、見田の解放観が「政治からの解放」でもあるのだ、という筆者の見田理解の核に繋がる意味で、重要性もあるのだが、本稿の課題に直接関連する議論ではないので、言及を見送った。

¹² 生成子は見田宗介の造語。遺伝子と生成子は同じものであるが、生き残って繋がっていくものという意味からすれば、遺ってしまっているという意味になりかねない遺伝

子という用語よりも、生成子の方が適切な用語であるという。

¹³ この「痛ましい例」という表現は、大澤（2017: 94）の表現を採用した。「凄惨」で「過酷」であるというのが、この「ひめゆり」隊が経験したことについての見田の用語系であるが、それは見田の社会構造分析を伴わなければ、用語として浮いてしまうので、ここは大澤の表現を用いた。

¹⁴ 「シノモン」とは見田によれば「種間/生体系内調和物質」（見田 2016: 24）のことである。この用語は少々拡張的に用いられる傾向があり、たとえば、見田は「顕花植物がさらに遠方の昆虫を広く誘引する方法としての花の色彩の鮮明は、物質事態の提供ではないが、広義の『シノモンの関係』と呼ぶことができる」（見田 2016: 24）と述べている。

¹⁵ 以下の記載内容の一部は、樫田（2023）と重なっているが、本稿と樫田（2023）とでは、別の作品として読むことが可能と言える水準で、アイデアの利用の仕方や位置付けの仕方が異なっている。したがって、許容される範囲の「自己の文章の再利用」とであると言える。『新社会学研究』および『現象と秩序』の執筆要領からの逸脱もないことは確認済みである。

¹⁶ 『走れメロス』は、青空文庫で無料で読むことができる（https://www.aozora.gr.jp/cards/000035/files/1567_14913.html）。しかし、青空文庫を出典とすることは不適なので、本論文では、新潮文庫版の頁を出典として呈示する。

¹⁷ この読解は、文理社の『教科書ワーク 光村図書版 中学国語 2年』という教科書ガイドに掲載されている大衆的読解にすぎないが、この部分に関しては、国文学および国語教育学の専門論文においても、ほぼ同様の解釈になっていた。あるいは、そもそも、「友情の再確認の達成を喜びあって抱き合う前に、そのための条件として二人は相互に罪を自己申告して、殴り合う必要があった」という太宰の場面設定の重要さにまったく気が付いていない専門読解者すらいた。たとえば、早稲田大学の幸田国広は、このシーンを「どうか約束の刻限までに走り切ったメロスは、信じて待ったセリヌンティウスと熱い抱擁を交わした後、お互いのほおを殴り合う」（幸田 2021: 123, 強調は引用者）と書いてしまっている。この前後を逆に書いてしまっていて、かつ、そのことに気が付かないこの無頓着さこそは、文学者達による「走れメロス」読解の盲点だが、この「相互殴り合いシーン」にあることの証拠であろう。

¹⁸ ここまで「囚人のジレンマ」に関する学的説明を怠ってきたが、関連する文献と議論は膨大であり、本稿では、とてもその全てには言及しきれない。ここでは、もっとも良質で社会学の理論的課題に丁寧に寄り添った説明が、長谷川・浜・藤村・町村（2019: 59）に以下の表とともにあることをまずは指摘して、その説明の要約を中心に、議論のエッセンスのみを解説したい。「囚人のジレンマ」はじつは刑事裁判を受ける前の「容疑者のジレンマ」のことである。共犯で捕まった二人の容疑者 A・B は別々に

取り調べを受けている。彼らには自白と黙秘の二つの選択肢がある。共に黙秘した場合は共に1年の懲役となる。共に自白した場合は、共に8年の懲役となる。一方だけが自白した場合、自白したほうは捜査に協力し、かつ自分に有利な供述もできるので3カ月の懲役ということにしよう。自白しなかったほうは罪のなすりつけも受けて(?)10年の懲役となるとしよう。つまり、下表のとおりである。

表1 囚人のジレンマの利得表 (長谷川他 2019: 59, 一部改変)

A \ B	自白する	黙秘する
自白する	共に8年	Aは3ヵ月, Bは10年
黙秘する	Aは10年, Bは3ヵ月	共に1年

このような表で選択毎の利得数値が与えられるとき、懲役以外に自白(裏切り)に対してのサンクション(応報罰)が与えられない場合には、両者にとって、自白することが「合理的選択」となる。つまり、利得の期待値が最大化される(出所後、マフィア=のような、裁判外の社会統制主体=が殺しに来る場合は別である。その場合には、「共に黙秘」が合理的選択となる)。つまり、選択機会が1回限りなら「裏切りが得」ということだ。けれども、同じ表を使っても、選択機会がN回ある場合は、話が違ってくる。本論文が問題にしているのは、このN回が意識される可能性がある場合である(議論を先取りするのならば、「走れメロス」におけるメロスとセリヌンティウスは、1回限りの囚人のジレンマゲームを生きているように一見見えながら、じつはそうではなかった、ともいえるのだ、というのが本稿の主張である)。

¹⁹ ここでの「無償化された友情」の議論が、1.2節でのメロスの「ひとりよがり」問題をも解決する議論になっていることのメカニズムを、念のため述べておきたい。「ひとりよがり」問題は、友情というものの特質上、友情は相互性を持っていなければならないが、相互性を保証するものは、相互性があると信じる気持ち(すなわち友情の存在)なので、「ひとりよがり」ではないかと疑い出せば、それを否定するための資源そのものを失ってしまっているのだ、疑いが解消されることがないという問題であった。まず確認しなければならないのは、そもそも、1.2節において、「ひとり合点」問題と「ひとりよがり」問題は、同じ問題の2面性として提出されていたことである。どちらも、合理性を突き詰めるなかでは、容易に否定できない問題として提出されていたのである。とすれば、この9節でも、同じ構図で考えて行くことが出来る。友情が「ひとりよがり」かも知れない問題は、王の疑心暗鬼地獄と同じ構造をなしているのだ、もし「無償化された友情」路線が疑心暗鬼地獄からの解放戦略として有効ならば、「ひとりよがり」問題からの解放も同様に可能になるはずなのである。それはつまり、「無償化された友情」という視角の獲得が、「過去や現在と切り離された、今待っている友達が

いるという状況にどう応えるのか、という判断のメカニズム」の獲得であるのならば、その視角を獲得した瞬間、2つの問題のどちらもが解決するということを意味しているのである。上記のような構図があるということは、つまり、以下のような読みがこの物語に可能になるということである。すなわち、『走れメロス』という小説における問題は1種類で、それに2種類の解決が与えられている、という形になっているのである。つまり、「功利性」に基づいた「合理性」の追究は、相互殺し合い関係を帰結するというのが、王の問題であると同時に「ひとりよがり」に悩むメロスの問題でもあった。この問題に、前半では湧水に幸運にも出会うというのがきっかけになって「無償化された友情」的解決が図られた（勇者メロスの復活）。ついで、後半では、相互殴打・相互抱擁シーンがきっかけになって、「諸連関リセット」的解決が図られた（王の共感の発生）。そういう小説としてメロスを読むのならば、ほとんど破綻のない、飛躍はあるけれども納得感のある小説として、この小説を読むことができるだろうと思われた。

²⁰ その証拠に、メロスは「間に合う、間に合わぬは問題ではない。人の命も問題でないのだ」（太宰 [1940] 1967: 179）と、石工であるセリヌンティウスの弟子のフィロストラトスに答えている。自分についてだけでなく、他者についても「功利主義」の軛から逃れている以上、王のイメージする「助け合う仲間」とか「相互の利益を最大化する仲間」というようなものに反応などメロスはしないだろう。

²¹ 吉良洋輔の2つの論文から多くのインスピレーションを得た。具体的には、吉良（2013）および吉良（2017）である。記して感謝したい。

文献

- 安藤宏, 2012, 「『走れメロス』」田中実・須貝千里編『文学が教育にできること——「読むこと」の秘鑰』教育出版, 168-187.
- 安藤宏, 2021, 「メロスの懐疑——「走れメロス」論」『太宰治論』東京大学出版会, 755-767.
- Axelrod, Robert M., 1984, 'The Evolution of Cooperation', Basic Books. (松田裕之訳, 1987, 『つきあい方の科学——バクテリアから国際関係まで』HBJ 出版局. →1998, ミネルヴァ書房.)
- 文理, 2021, 『中学 教科書ワーク 国語 2年 光村図書版』文理.
- 太宰治, 1940, 「走れメロス」『新潮 (1940年5月号)』。→1967, 「走れメロス」『走れメロス』新潮社, 163-182. (資料によれば、雑誌『新潮』に出た後、部分的に改稿されて1940年6月に河出書房から『女の決闘』の一部として刊行されたというが未見である)
- 出口智之, 2021 「他者が見えたと、自分もみえる」渡部泰明・平野多恵・出口智之・田中洋美・仲島ひとみ『国語をめぐる冒険』岩波書店, 87-131.

- 社会学のために』43巻19号.
- 長谷正人, 1991, 『悪循環の現象学——「行為の意図せざる結果」をめぐって』ハーベスト社.
- 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志, 2019, 『社会学(新版)』有斐閣.
- 今福龍太, 2015, 「非情のユートピアニズム」『現代思想』43(19): 114-122.
- 樫田美雄, 1991, 「施設内文化の研究——2つの悪循環過程の例示とその意味の考察」『母子研究』11: 12-27.
- 樫田美雄, 2023, 「『走れメロス』からの社会学——文学から学ぶ社会学と社会学から学ぶ文学の循環を『走れメロス』をもとに実践する」『新社会学研究』8: 5-19.
- 樫田美雄・小川伸彦編, 2021, 『〈当事者宣言〉の社会学——言葉とカテゴリー』東信堂.
- 吉良洋輔, 2013, 「なぜコミュニケーションは社会的ジレンマを解決させるのか?——繰り返しN人囚人のジレンマの均衡精緻化」『理論と方法』28(1): 107-124.
- 吉良洋輔, 2017, 「繰り返しゲームにおける社会規範の内面化と自己制裁——規範に従う心」『理論と方法』32(2): 271-289.
- 幸田国広, 2021, 『国語教育は文学をどう扱ってきたのか』大修館書店.
- Mandeville, B., 1714, *The Fables of the Bees: or, Private Vices, Public Benefits*. (和泉治訳, 1985 『蜂の寓話——私悪すなわち公益』法政大学出版局. (原著出版地不明))
- 見田宗介, 2016, 「走れメロス——思考の方法論について」『現代思想』44(17): 16-26.
- 光村教育図書, 2021, 『教科書ガイド【2021年度版】国語2年 光村図書版』新興出版社.
- 森正稔, 2015, 「見田宗介と七〇年代解放論のゆくえ」『現代思想』43(19): 236-251.
- 成田龍一, 2015, 「見田宗介をめぐってのこと, 二つ, 三つ」『現代思想』43(19): 210-223.
- 奥村隆, 2015, 「〈明晰〉なる反転——見田宗介=真木悠介におけるその拠点と陥穽について」『現代思想』43(19): 97-113.
- 大澤真幸, 2015, 「〈自我の起原〉論」『現代思想』43(19): 56-75.
- 大澤真幸, 2017, 「『見田宗介=真木悠介』総特集から『走れメロス』へ(特別付録1)」大澤真幸・見田宗介『〈わたし〉と〈みんな〉の社会学』左右社, 78-95.
- 高木まさき, 2001, 「『走れメロス』, そのテーマとユーモアの二重構造——自己の読みを超えるということ」田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編2年』教育出版株式会社.
- 田中実, 1996, 「お話を支える力——太宰治『走れメロス』」田中実『小説の力——新しい作品論のために』大修館書店, 119-161.
- 若林幹夫, 2015, 「翼と足——重層する時間と空間」『現代思想』43(19): 148-161.

【編集後記】『現象と秩序』第20号記念号をお届けします。第1号の刊行から9年半、準備期間を入れると、ほぼ丸10年になります。慣例により、総目次（発行順、著者名順）および、振り返り記事を掲載しました。振り返り記事の前半は堀田委員長が、後半は読者代表として松繁卓哉先生が書いて下さっています。どちらも力作ですし、一種の社会評論となっています。まずは、巻頭からお読み下さい。

本誌は「ハイブリッド」誌ですので、WEB上で容易にバックナンバーをご覧頂けます。本号の「総目次」を見ながら、気になった論文をザッピングしてみるの、いかがでしょうか（インターネット上では、カラー写真はカラーのまま掲載しています。きれいですよ）。

関連して、「ニュース」です。国立国会図書館は、2013年7月以降、インターネット上の逐次刊行物も法規に則って収集しており、その無料公開もしています（収集は「オンライン資料収集制度」として実施しており、公開は「国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/>）」内で行っています）。『現象と秩序』誌もすでに収集対象となっており、現在は、国立国会図書館の館内限り公開ですが、近日中に、無制限一般公開になる見込みです。本誌が公開に使っている@ニフティのサーバーが停止しても、こちらの国立国会図書館での公開の方は継続され続けますので、お心覚え頂ければ幸いです。

本号には、通常原稿も4篇が掲載されています。通訳が専門職として如何に高度なコミュニケーションを実践しているかを明らかにした飯田論文、落語の語りの比較研究の結果から「江戸の語り手はあくまでも俯瞰した立場をとるのに対し、上方の語り手は話の中にやや参与する姿勢がある」（かも）という不思議な特徴の発見に至りかかっている村中論文、精神障害者の居場所にかかわるモノグラフである遠部ほか論文、『走れメロス』の読解に社会学を積極導入しようとしている榎田論文、と今回も興味深い論文が集まりました。面白いと思った論文には、ご感想など頂戴できればうれしく思います。どうぞ今後も倍旧のご交誼を賜りますようお願い申し上げます。 (Y.K.)

『現象と秩序』編集委員会（2023年度） 編集委員会委員長：堀田裕子（摂南大学）
編集委員：榎田美雄（摂南大学）、中塚朋子（就実大学）、加戸友佳子（摂南大学）
編集協力：村中淑子（桃山学院大学） ※本冊子は第20号改訂版（第4論文のみ改訂）

『現象と秩序』第20号 2024年 3月31日発行(Revised April 25th,2024)

発行所 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町 17-8
摂南大学 現代社会学部 榎田研究室 現象と秩序企画編集室
電話・FAX) 072-800-5389 (榎田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp
PRINT ISSN : 2188-9848 ONLINE ISSN : 2188-9856
<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>
